

波
に
ふ
れ
る

【登場人物】

守井 叶美 もりい かなみ

徳島県の中学生

岩島 美波 いわしま みなみ

東日本大震災の被災者

叶美の母

先生

生徒 A

生徒 B

【概要】

徳島県の中学生・叶美の学級に、東日本大震災の被災者・美波が転校してくる。叶美は美波と話す中で、美波の被災の記憶に触れる。そのような中、叶美は母の転勤で県の沿岸部に移住することになる。そこは、南海トラフ地震発生時に高確率で津波等の被害を受ける地域だった。不安を抱きつつも叶美は町の美しさに魅了され、町を災害から守りたいと強く思うようになる。町職員となり災害対策を進める中、南海トラフ巨大地震が起こる。

叶美 M 「波の音がする」

穏やかな波の音と鳥の声

学校のチャイムが鳴る

先生 「はいみんなー、昨日話した転校生の岩

島美波さんです。仲良くするんですよ。（小

声で）自己紹介できる？」

美波 「はい。岩島、ミナミです。……みいち
やんって呼んでください。よろしくお願い
します」

生徒 A 「うわー！ ヒョージュンゴ」

生徒 B 「東北の子やのに標準語なんじゃ」

先生 「こらっ！ ……岩島さんは震災を経験
して徳島に来とるんじや。みんな、自分が
発する言葉を改めてよく考えなさい。仲良
くな。ほな、岩島さんは一番後ろの守井の
隣の席に」

美波が席につく

叶美 「ミナミちゃん……みいちちゃん？ 私、
守井叶美。よろしく！」

美波「カナミちゃん。よろしくね」

叶美「ミナミちゃんって、名前の漢字、どうやって書くん？」

美波「……あ……『美しい』、『波』」

叶美「そうなんじゃ！ 美しい、一緒。私は

『叶う』に、『美しい』。ミナミとカナミ

やし、私たち、なんか名前似とるな」

美波「（柔らかく笑って）たしかに」

叶美「やったー。共通点」

まだ慣れないながらも笑い合う二人

叶美M「それから私たちは、教科書をみいち

やんに見せたり、給食を一緒に食べたり、

体育でバドミンソンのシャトルを打ち合っ

たりして、時間をかけて徐々に仲良くなっ

ていった」

生徒A「なあ。岩島さんって、なんでわざわざ

ざ徳島に来たん」

美波「……親戚が徳島にいるから」

生徒 B 「ほな、自分の家では住めんようにな
ったってこと？」

美波 「……」

叶美 「あんたら！　そういうこと言うのやめ
なよ。単純に好奇心で聞きたいだけなんか
もしれんけど、みいちゃんがどんな思いを
したかわからん状態で、軽々しく聞いて良
いことちゃうと思う」

生徒 B 「そっか……ごめんなあ岩島さん」

生徒 A 「はー、だるー」

叶美 「ちよつと！」

美波 「(さえぎるように)　いいよ、叶美ちゃ
ん。ありがとう。叶美ちゃんが理解しよう
としてくれてるだけで十分だから」

叶美 「みいちゃん……」

やや強めの地震が起こる

生徒 B 「うわっ、めっちゃ揺れよる」

生徒 A 「まさかこれ、南海トラフちゃうん」

先生 「みんな落ち着いて！　机の下に入って
頭守りなさい！」

叶美 「えっ、えっ」

美波 「叶美ちゃん」

叶美 「怖い、どうしよう」

美波 「叶美ちゃん！」

地震の音が小さくなる

美波 「——大丈夫。この地震は大きくない」

叶美 「そうなん？ でもなんでそんなこと

……」

叶美 M 「そう言いかけてハツとした。私は、
みいちゃんの優しい表情の裏に、強い悲し
みが見えた気がして、目を背けることがで
きなかった。間もなく揺れは収まり、通常
の授業が続けられた。——ここ徳島でも甚
大な被害が出ると言われている、南海トラ
フ巨大地震。そして、二〇一一年、二万人
以上の死者・行方不明者が出た東日本大震
災。まだ起きていない地震と、起きてしま
った地震。その凄まじい体験の差を感じ
て、私の腕にはひどい鳥肌が立った」

美波「東北の地震の時、学校の教室で居たんだけど、窓ガラスが全部割れたの。そのあと避難が始まって親が迎えに来てくれたんだけどね。わたしの家、古かったから潰れちゃってたんだ。避難所生活もしたし、余震が怖くて眠れない日もあった。でも、身近な人で亡くなった人は誰も居なかった。きつとすごく……ラッキーだったんだと思う。だからね。わたしは被災者……被災者ではあるんだけど、正直わからないんだ。自分が悲しんでいいのか、震災のことを自分が話していいのか」

叶美「みいちゃん……っ……しんどかったよな。ごめん、軽い言葉でごめんね。でもな、みいちゃんは今日の地震起きた時、大丈夫って言って、私を、守ってくれた。辛いこと一番思い出すのはみいちゃんやのに」

美波「それは、叶美ちゃんがいつもわたしに優しくしてくれるからだよ」

叶美 「ほんなん言うたらお互い様じゃよ。み
いちゃん。みいちゃんは、周りの人の命こ
そ無事だったけど、とてつもなく悲しい体
験をしたことに違いはないと思う。もし、
悲しいこととか伝えたいこととかあった
ら、私でよければ頼ってよ。それでみいち
やんの心が軽くなるなら、私はその手助け
をしたい」

叶美が帰宅してリビングの扉を開ける

母 「おかえりー」

叶美 「ただいまー」

母 「なあ、叶美。ちよつと大事な話がある
んやけど」

叶美 「どしたん？」

母 「お母さんな、四月から、仕事で県の南
部の方に異動することになったんよ。なる
べく週末はこっちに帰ってきたいけど、遠
いけんちよつと難しいかもしれん。叶美は
どうしたい？ おばあちゃんちに行く？

それか……お母さんと一緒に、南に行く？」

叶美「南……。それって、地震が起きたら津波が来るかもしれん場所ってことじゃよな」

母「うん、そうなるわな」

叶美「そんな場所にお母さん一人で行かせたくない。叶美もついて行く」

母「転校することになるけど、ええんやな？」

叶美「……うん」

放課後の学校

叶美「みいちちゃん、私な、徳島の南の町に引っ越すことになったんよ」

美波「え……：：：そうなの。すごく、寂しい。……：：海沿いの町ってことだよね」

叶美「うん。おつきい海岸がある、海の町」

美波「叶美ちゃん……：：叶美ちゃん。わたし、何歳になっても叶美ちゃんのこと大好きだ

から。大人になってくたびにき、楽しい話、いっぱいしようね」

叶美「うん！ 約束」

美波「……あのね、わたしが住んでた県の言葉、叶美ちゃんに覚えておいてほしい」

叶美「何？」

美波「『てんでんこ』。津波が来たら、てんでばらばらに高台へ逃げろっていう言葉」

叶美「てんでんこ……」

美波「津波が押し寄せてるなか、みんなで逃げようとして共倒れになったら元も子もない。それから、人が逃げている姿を見た他の人に、自分も逃げなきゃいけない状況なんだって、気付かせる効果もある。過去の震災から学びを得た、東北の沿岸部の教え」

叶美「そんな意味なんやな。わかった。しっかり覚えとくよ」

美波「これが役に立つ日は、絶対に来ないでほしいけど……」

叶美 「うん。ありがとう、みいちゃん」

穏やかで大きな海の音

叶美 「お母さん、この町の人って、津波が来るかもしれないのになんでここにずっと住むんだろうな」

母 「そうやな。津波のこと考えたら怖いよな。でも、このおっきい海を見たら、不思議と怖いこととか嫌なこととか、波が持つていってくれる気がせんぞ？ 綺麗だろ、海」

叶美 「うん。今までに見たことないくらい」

叶美 M 「それから私は、数年間、この海沿いの町で学生生活を送った」

母 「叶美！ お母さんの職場、また前のところに戻ることになりそうなんよ。叶美も戻るだろ？ ごめんな、いっぱい連れ回して」

叶美 「お母さん。私、こっちに残りしたい」

母 「ええっ？」

叶美 「高校卒業したら、この町で働きたいんですよ」

母 「大学とか行かんでいいの？　ここはえ

え所やけど、かなり不便やし。それに……

南海トラフは、いつか来るんでよ？」

叶美 「それでいいと思つとる。私はここで、私にできることがあると思う」

三回ノックして面接会場の扉を開ける

叶美 「失礼します。（少し間を空けて）守井

叶美です。私は、母の仕事の都合でこの町に越してきました。住んでいるうちに、浜辺から見える海の美しさや、住民の皆さんの穏やかさに触れ、町が大好きになりました。ですがこの地域には、いずれ大地震と津波がやってきました。その被害を、人の力で最小限まで抑えたいです。私とその災害対策への取り組みの筆頭に立つ覚悟で、こ

の町の職員を志望しました。私には東日本
大震災で被災した親友がいます」

叶美 M 「お母さんを守りたいと思った。みい
ちゃんの心を守りたいと思った。そして
今、この町を守ろうとしている」

叶美 M 「実際に高台への移動を伴う避難訓
練。町のみんなにお願いして、高齢者や障
がい者のスムーズな避難をシミュレーショ
ンした。中高生と高齢者の距離を近付ける
べく、会話をする機会も設けた。役場には
避難グッズの中身を紹介するコーナーを作
ったり、簡易トイレの使い方の講習なども
行ったりした。避難所となる体育館で、ペ
ットの動物たちもなんとか一緒に過ごせる
よう工夫して、提案が通った。県に働きか
け、サテライトオフィスを県内に置くIT
企業と協力して、災害時用アプリが開発さ
れた。そして、みいちゃんが教えてくれ

た、津波が来たら『てんでんこ』を、合言葉のように町の人たちに広めた。こうして数々の取り組みを行っているなか――その時は、今日、やってきた」

大津波が迫る音がする

叶美 M 「私はこの波を、悲劇の象徴にはさせない」

高台へ走りながら叶美が叫ぶ

叶美 「町内の皆さん！ 津波が来ます！ 逃げてください！ 避難訓練の通りに、高台へ上がってください！ てんでんこです！ 命を！ 命を優先して！ この地震は！ 『本物』です！」

大津波の音（CO）

叶美 M 「波の音がする」

（了）

【参考文献】

・NHK大阪放送局「津波てんでんこ…みんなの防災」

[https://www.nhk.or.jp/osaka/bousai/evac](https://www.nhk.or.jp/osaka/bousai/evacuation/03.html)

[nation/03.html](https://www.nhk.or.jp/osaka/bousai/evacuation/03.html)（参照二〇二四年七月二八

日）